

【以善会レポート】第九弾

齋田茂先の書道研究

Ⅱ 『尚古法帖』で古書跡復刻Ⅱ

中山正清

はじめに

『以善会レポート』第八弾では、『掛川誌稿』編者として知られる齋田茂先の生涯を概観しました。そこで触れたように、茂先は書道に造詣が深く、熱心に研究を進めていましたが、その成果を十分にまとめることなく四十二歳で死去してしまい、その業績はほとんど忘れられています。

本稿では、茂先の書道に関する業績を掘り起こし、紹介します。筆者は書についてはまったくの素人ですから、見落とした文献等が少なからずあり、また、思わぬ誤りもあることでしょうが、専門家によって本格的に茂先の業績に取り組まれる契機となることを期待して、本稿をまとめてみました。

## 一、『尚古法帖』

### (ア)「毫も遺憾なし」と評価

本レポート第八弾で紹介したように、茂先の親友である松崎慊堂の記した「齋田君墓銘」には「尤モ書学ニ邃ナリ。輪池屋代翁ニ事へ、持明藤公ニ及ビ、其ノ堂室ニ入ル」とあります。つまり、茂先は書を深く研究していて、その師は屋代弘賢（号は輪池）と公家の持明院家でした。

では、茂先は書道にどのような業績を残したのでしょうか。「墓銘」には茂先の著書として「尚古法帖卅卷、金石跋二卷、掛川領志未脱稿八卷」とあり、「尚古法帖と金石跋は後世につたわっていない」と『掛川市史』中巻は記しています<sup>①</sup>。しかし、『国立国会図書館サーチ』で『尚古法帖』を検索すると、空海筆の第八と藤原行成筆の第十八がヒットしますから、この二冊だけは残っていることになります。なお、「法帖」とは「習字の手

<sup>①</sup> 『掛川市史』中巻、九百八十二ページ。

本<sup>②</sup>」のことです。

松崎慊堂は文化十四年（一八一七）に記した「秋萩帖跋」<sup>③</sup>でも、茂先は書法を究め書跡の真偽をよく見極めたが、質の悪い手本が横行していたため、有名な書家の書跡を自ら模して彫り、『尚古法帖』三十巻として世に示したという趣旨のことを書いています。

茂先は慊堂に、このような『尚古法帖』編纂の狙いを話したことがあったのでしよう。そして慊堂は、『尚古法帖』は昔の能書家の真跡を細かな点にいたるまでよく写していると、「無<sup>三</sup>毫遺憾<sup>一</sup>」と高く評価しています。

#### （イ）野心的な試み

土佐藩出身で明治政府の司法大輔などを務めた細川潤次郎（一八三四—一九二三）の『梧園書話』<sup>④</sup>には、「集古法帖尚古法帖」と題した文があり、『尚古法帖』について以下のように記しています。

尚古法帖。有<sup>二</sup>二種<sup>一</sup>。一則寛政中。藤原茂利所<sup>レ</sup>輯。而井上清風刻<sup>レ</sup>之。一則文政中。斎田茂先所<sup>レ</sup>輯。而屋吹久徴刻<sup>レ</sup>之。二種伝者甚少。又未<sup>レ</sup>見<sup>二</sup>完本<sup>一</sup>。可<sup>レ</sup>惜也。

寛政年間に刊行されたものは藤原茂利、文政年間のものには斎田茂先の名前ですが、同一人物であることは明らかです。ここにいう「二種」は第八と第十八を指すと考えられ、明治時代後半には、既に他の巻は失われているようです。「二種伝者甚少」（二種の伝わるものはなはだ少ない）とありますから、第八と第十八も希少なものとなっていたのです。

『梧園書話』は「其広輯<sup>二</sup>本邦古人名迹<sup>一</sup>者。従<sup>二</sup>此二帖<sup>一</sup>始」（ひろく日本の古人の有名な筆跡を集めたのは、集古法帖と尚古法帖に始まる）とも

② 『角川漢和中辞典』（角川書店、一九五九年）。

③ 『松崎慊堂全集』巻十二（冬至書房、一九八八年）

④ 一九〇二年刊。国立国会図書館デジタルコレクション『梧園書話』三五コマ。

記しています。茂先の『尚古法帖』はそれだけ野心的な試みだったということになります。

なお、『集古法帖』は南部（陸奥国）の北条鉉（永根氷斎、伍石）が寛政年中に編纂した法帖です。鈴木淳「板木師井上清風の刻業」<sup>⑤</sup>は、この永根伍石の依頼で板木師の井上清風が寛政五年に王羲之の書を刻していて、伍石が記したその跋によると、この書は塙保己一が蔵していたものらしいと、指摘しています。さらに、藤原行成筆「重之集」を刻した『尚古法帖』の齋田茂利（茂先）の跋（寛政十年）に「源重之の百首詠が後世の模範になった」という趣旨の保己一の言葉を載せているとして、「当時の江戸における古法帖の刻板事業の背後に保己一がいたことは認めてよさそうである」と、同論文は記しています。

茂先の師が、保己一のもとで『群書類従』を編纂した屋代弘賢であることを考えれば、茂先が『尚古法帖』編纂を思いついたのには、塙保己一が存在が影響していたというのも納得できるように思えます。

#### （ウ）近代茶人の評価

明治から昭和戦前期にかけて経営者・茶道研究家として活躍した高橋義雄（箒庵、一八六一～一九三七）の日記<sup>⑥</sup>の大正四年（一九一五）十月二十三日条に、箒庵らが尾張徳川家を訪ねる前のこととして、以下の記述があります（以善会の和田厚さんから御教示と該当個所のコピーをいただきました）。

今回尾州家にて余等に示さんとする書画器具中に行成卿筆と云ふ重之家集あり。此重之歌集は遠州の人齋田士華、藤原茂利が尚古法帖と云ふに模刻したる者にて、其跋文に寛政十一年十一月刻とあり、古来極めて有名なる古筆なるが、行成とは言へ慥に女流の筆蹟なるが如し。今度原物と引き較べんとて其模刻を持参せりとて、大口氏は之れを余

<sup>⑤</sup> 『近世文藝』四九号（日本近世文学会、一九八八年）所収。

<sup>⑥</sup> 『万象録』卷三（思文閣出版、一九八七年）三百九十二ページ。

等に示されぬ。

ここからは、(1)「尚古法帖」第十八の存在は戦前の茶人らの間では有名だった(2)行成の真筆ではなく女性の筆とみられる—という点が注目されません。茂先は行成の真筆と信じていたのですが、後世の目の肥えた数寄者からは女性の筆跡だと指摘されています。

なお、法帖というのは書道史の研究に欠くことができないと思われるのですが、研究が遅れているようです。中野三敏編『和刻法帖』目録編<sup>⑦</sup>の自序で、編者は「江戸時代に板行され、或いは肉筆帖として残された法帖の総数は、一体どの位あるものなのか。ところがその目安となるべき邦人法帖や和刻法帖の総目録なるものがさっぱり見当たらないのである。そんな時最も頼り甲斐のある『国書総目録』にも、この領域は未収のものがやたら多いことにも気づいた」と嘆いています。

『尚古法帖』の第八、第十八以外の帖がどこかに眠っていて、発見されないものでしょうか。

#### (エ)『尚古法帖』の刊行

『尚古法帖』第十八についてみると、前掲の「版木師井上清風の刻業」は、『尚古法帖』第十八は藤原行成の書を刻したもので、寛政十年(一七九八)十一月の斎田茂利の跋があると記しています。

茂先は慊堂と出会った享和年中(一八〇一〜〇四)よりも前から、熱心に書の道を探究し、藤原行成の書跡を『尚古法帖』第十八として刊行していたのです。

次に空海筆という『尚古法帖』第八についてみてみます。文政二年(一八一九)七月に慊堂が記した「書高野大師真跡後」<sup>⑧</sup>には、「亡友士華得古摹本。録附三前帖後」(亡き友の茂先は、高野山宝亀院旧蔵の空海筆の古い模写本を手に入れ、既に刊行している法帖の後に付した)とあります。

<sup>⑦</sup> 青裳堂書店、二〇一一年刊。

<sup>⑧</sup> 『松崎慊堂全集』卷十三。

また、何年に記されたかは不明ですが、慊堂の「諸学法目録後」<sup>⑨</sup>には、東寺所蔵の空海の真蹟について、「亡友士華以乙亥歲入レ京。就ニ真蹟一鉤摹。歸匝月。一病不レ起。為ニ絶筆一。久徵果能成ニ其志一。手自入レ刻。此乃尚古法書之第八帖也」(亡き友の茂先は文化十二年に京で空海の真蹟をなぞって彫っていたが、一カ月ほど後に江戸に帰り病に倒れたまま再起できなかつたので、弟子の屋吹久徵が茂先の遺志を果たすために自ら彫った。これが尚古法書の第八帖である)とあります。

『尚古法帖』第八の最初の版がいつ刷られたのかは不明ですが、高野山宝亀院旧蔵、東寺蔵の書跡と、新たに入手するたびに増補していったことになります。

## 二、『秋萩帖』、顔真卿など

国文学研究資料館の『日本古典籍総合目録データベース』には、斎田士華書の『秋萩帖』(文化十四年刊)の書名があります。慊堂の「秋萩帖跋」はこの『秋萩帖』のために書かれたものです。

『秋萩帖』は平安中期書写の巻物で、前半に『万葉集』『古今和歌集』などの和歌四十八首を草仮名で書写し、後半に中国・東晋の書家王羲之の書状を臨写したものです。巻頭二首は小野道風、残りは藤原行成筆と伝えられています<sup>⑩</sup>。

慊堂の「跋」によると、茂先は優れた彫りの『秋萩帖』版本を見つけ、「時歳暮。一貧如レ洗。求レ讐。急ニ於星火一。遂捐ニ其宝刀一口一以償。」(ときは年末で何かと物入りな時期だった上に、茂先はもともと貧しかったのですが、どうしても欲しくてたまりませんでした。そこで、宝としていた刀を売って版本を買った)というのです。

これが何年のことだったかは記されていませんが、慊堂はこんな茂先について「士華家世武弁。便能売刀買帖。風流傾倒。有古文士風。」(武家に生まれたのに刀を売って帖を買うほど風流に傾倒し、古文士の趣があった)

<sup>⑨</sup> 同右卷十三。

<sup>⑩</sup> 『新版角川日本史辞典』「秋萩帖」項。

と評しています。茂先の書に対する執心ぶりがうかがわれます。

茂先はこのほか、唐の有名な書家である顔真卿（七〇九〜七八五）の書も版行しようとしていました。慊堂の「顔氏家廟碑跋」<sup>⑩</sup>には文政二年（一八一九）晩秋に掛川の屋葺久徴（士遠）の代筆として、「亡友斎田士華既鈞摹入レ刻。辛未之春。燬ニ於將レ成。爾後士華蓄レ念未レ遂。遇レ病而歿。余嘗受ニ鑄法於士華一。痛ニ其志之不レ繼。精審鈎刻。用ニ二年力一以成レ之。」と記しています。

つまり、久徴の亡き友である茂先（士華）が「顔氏家廟碑」を彫ったのですが、辛未（文化八年（一八一二））春に完成間近のところまで焼けてしまいました。茂先はこれを残念に思い、完成させたいと考えていたのに、病死してしまったのです。久徴はかつて彫り方を茂先に習ったことがあったので、茂先の思いを何としても実現させたいと思い、二年かけて丁寧な彫って完成させたのです。

また、慊堂が文政二年（一八一九）六月に記した「張希古墓誌跋」<sup>⑪</sup>は、茂先が「古唐人」の田穎が天宝十五載（七五六）に書いた「張希古墓誌」を、考証学者で慊堂の友人狩谷掖斎（一七七五〜一八三五）から茂先が借りて彫った旨が記されています。跋には、「与ニ亡友士華一有ニ水乳之合一」（亡き友士華とは意気投合した）という記述もあり、慊堂と茂先の仲の良さが改めて思い起こされます。

茂先は和漢の名筆を求め、入手できたものについては、腕の良い版木師に依頼したり自ら彫ったりして版行していました。屋葺久徴という弟子がいたということから、茂先自身が優れた彫りの技術も身に付けていたことがわかります。

しかし、このような書に関する茂先の業績は、その死後も慊堂ら友人が出版に尽力したにもかかわらず、そのほとんどが散逸してしまったのです。

### 三、将棋の駒銘を書いた養子文右衛門

<sup>⑩</sup> 『松崎慊堂全集』 卷十二。

<sup>⑪</sup> 『松崎慊堂全集』 卷十二。

戊辰戦争で新政府軍への軍艦引き渡しを拒んで箱館に脱走した榎本武揚の一行に、甲賀源吾という旧掛川藩士がいます。源吾は軍艦回天丸の艦長で、明治二年（一八六九）に宮古湾（岩手県）の海戦で戦死しています。この源吾の伝記に『回天艦長甲賀源吾伝』<sup>13</sup>があり、その中に源吾の兄で同藩士二見家の養子となった二見氏治の自叙伝が収載されています。

そこには嘉永五年（一八五二）頃のこととして、「又町井利左衛門拵将某銘を金龍と云ふ受レ伝利に耽る（割註…三十五俵三人扶持は薄給なり故に種々内職を試む）」とあり、また文久三年（一八六三）頃のこととして「此頃齋田小源多より将某の銘金龍の名を譲受、礼金三分出す」と記されています。

「町井利左衛門拵（こしらえ）」を「町井利左衛門が完成させた」と理解すれば、氏治は町井利左衛門が始めた将棋の駒の「金龍」という書体を習って駒銘を書くことを内職とし、その後に齋田小源多が利左衛門から受け継いでいた「金龍」という名跡を氏春が譲り受けたということになります。

金龍の駒は江戸末期以降大いに流行し、「二世を風靡した駒（書体）」であったが、現在では人気がなくなりあまり作られていない（増山雅人著『カラー版 将棋駒の世界』<sup>14</sup>）とあります。

また、小説家幸田露伴（一八六七～一九四七）は、「象棋余談」という文章の中で、金龍銘の駒について「真龍より少し前の人たりや、金龍といふが有り。これも凡そ真龍に似たり。同系のものにして優るともいふべし」と記しています<sup>15</sup>。真龍というのは江戸時代に将棋の家元だった大橋家が用いて「家元ごま」と呼ばれていましたが、金龍はそれよりも優れていると高い評価を与えているのです。

既に見たように茂先は文化十二年（一八一五）に亡くなっていますから、ここに出てくる齋田小源多は、茂先の養子常吉のことだと考えられます。

<sup>13</sup> 石橋絢彦著、甲賀源吾伝刊行会刊、一九三二年。

<sup>14</sup> 中公新書、二〇〇六年刊、百五頁。

<sup>15</sup> 『露伴全集』第十九卷（岩波書店、一九五一年）四百三十五頁。

『三百藩家臣人名事典』第四卷<sup>⑩</sup>の「齋田文右衛門」項によると、茂先の子常吉（文右衛門）は父と同じ小源多とも名乗っています。おそらく常吉は養父と同じく能筆で、将棋の駒の銘を書いて内職としていたのでしょうか。前述したように、齋田家の経済事情は「一貧如洗」でしたから、常吉が内職していたことに不思議はありません。

なお、同事典によると、後に文右衛門と改める常吉は、文化十二年に中小姓で召し出され、以後は掛川勝手、膳番、数寄屋道具預、馬廻見習、大目付取次などを歴任し、七十石の扶持を受けました。また、町井利左衛門も掛川藩士で、馬廻、側用人などを歴任し、安政元年（一八五四）に亡くなっています。

インターネット上の『名駒集覧―金龍造・法眼董斎書』では、二見氏治に金龍銘を譲った齋田小源多について「掛川藩士で掛川誌稿を編纂した人物」としていますが、年代が合いません。ここではこの誤りを正すとともに、幕末の掛川藩士が将棋の駒銘を書いて内職としていて、それが高い評価を得ていたという興味深い事実を紹介するため、茂先をテーマとする本稿の趣旨からは外れますが、載せておきました。

#### おわりに

齋田茂先は、屋代弘賢や持明院家の弟子として書の道を探求し、ほとんどが散逸してしまっただけとはいえ、先人の名跡を広く知ってもらうための法帖を作成しました。と同時に、弟子を育成していたであろうことがうかがえます。

はつきりしている弟子は、彫り方を茂先から習った屋葺久徴だけですが、養子の常吉も茂先から書を学んだことでしょう。前稿でも指摘したように、茂先には多くの友人がいましたから、掛川藩士などの中には茂先の影響で書を本格的に始めた者がいたと想像することもできます。もしかしたら、町井利左衛門もその一人だったのかもしれませんが。

齋田茂先を中心とする掛川藩士の間での書の文化の広まりは、今後の研

<sup>⑩</sup> 新人物往来社、一九八八年。



究課題になり得るのではないでしょう。また、掛川藩の書の文化が、幕末には将棋の駒の銘を書くという内職に役立ち、藩士の家計の一助になっていたとすれば、これも追及してみる価値がある課題でしょう。

(了)